

粵音借記國字彙

中

虚鐸傳記國字解

洛陽山本守秀解註

曲キヨク名メイ虚キヨ鈴レイ以モツテ舊モト摹モス鐸ラ音イ命メイ之シ器キ命メイ

之コレヲ曲キヨクニ而ス為キヨ虚タツト鐸ニ元元來來世世又又尺尺八八とらふは

りりははけけききよよくくのの名名ととききよよれれいいととゆゆふふ。ききととききいい乃乃

めめいいドドこれこれををききよよくくににめめががててききよよたたくくととすすとといい。志志るる

(p65)

元來世に尺八というは此
きよたくの事なり。其おこ

りは、此きよくの名をきよれいという。もとれいの
ねをうつしたる物なるゆえ名付たり。これをきに

めいじこれをきよくにめいじて、きよたくとすとは、しかる
ゆえに、きよたくと名付て、ふえの名にもしたり。吹やうの

(p66) 名にもしたる事なり。

これはたくとれいは器物のよくあいにたるゆえに、後世あやまりて、きよれいとすにや。

たくとれいとはよく似たるものなればすえになるに

したが、ついにその名を取りちがへて、きよれいとよび

来たるなり。ひつきやう、器物の名ときよくの

名と、うちまぜていいならはせるなるべし。

かつ器の名、尺八としやうずるを以て、

只きよくめいとなせるは、おおいにその

五箇金一

名ニロ

名もある

りあり

鐸鈴以相似後世誤爲

虚鈴

に。後世何やゆりて。きよれいとすにや

たくとれいとすにやゆりて。きよれいとすにや

たくとれいとすにやゆりて。きよれいとすにや

たくとれいとすにやゆりて。きよれいとすにや

たくとれいとすにやゆりて。きよれいとすにや

且以器名稱尺八唯爲曲名大失

其真者乎

か川器名尺八とあやまりて。きよれいとすにや

虚 = 鐸 = 鈴 (虚 = 鐸 = 鈴)

唐にて
中国風
に考へ

ちん哉うーあふをのうやは。近來はあふ此名を
からひて。あふいも。洞簫乃てと。日本にて尺八と
いふまゝあり。いふの名をえちぐうーあふて。
あふやうれ名むうりにある。大キふあやまらなり

普化禪師當世之一大知識也
フケゼンジハタクウセイノイチダイチシキナリ
まら
こま

たぐは。ちりを云らん。ふは。こと。を。普化
洞簫ハ。唐朝の人あり。當世とは。を。世ふて一方

のち知識。ちり。が。す。虚無僧の因縁と
あり。る。ゆ。は。を。あ。に。の。る。を。の。なり

在于鎮州而自甘狂逸
アツチチンシウニミツカラアマジキヤウイツラ
ちんあうにあつて
まら
こま

しんをうしなうものかとは。近來此ふえの名を
からにて、あるいは、洞簫のこととし、日本にて尺八と
いふによつて、いにしえの名を取りちがへうしなふて、
ふきやうの名ばかりになるは、大きにあやまりなり。

まづきよたくの起りを言はん為に、此ことばを挙げたり。普化
禪師は唐朝の人なり。当世とは、其世にて一方
のちしきにてありしが、其すえが虚無僧の因縁と
なりけるゆえに、濫觴をここにのぶるものなり。
ちんしうにあつてとは、普化の住み給ひ

(p68) し所を鎮州という国なりとしらしむる也。みづからきやう

いつをあまんじとは、狂は物くるひなどとは又ことなり、気徹

の高き事をいふ。逸とは禅機のすぐれたるをいふ。外

眼には、物ぐるはしきたわむれをこのむようにみゆる

が、気しやうのかかわらぬ高き所なり。それは化度も

ひとかたならぬ自在を得給へりという事なり。

鐸とは金口木舌とてかねにて作

りて舌は木なり。鈴の舌はかねなり。形象は相似たり。

振るとは、ふり動して音を出すをいふ。其音とともに

となへられし言なり。市街に出て諸人に対する

度ごとに、左のごとく語られしなり。

一不を鎮州と云ふはありと云うしむる也。みづからきやう

ら我何あんどとい。狂を極くるひあどい又理なり。宋徹

乃高き事をいふ。逸とい禪機のすぐれたるをいふ。外

眼も。物ぐるはしきたわむれをこのむようにみゆる

ら。氣志やうれか、わらぬ。高き所なり。化進ば他度も

ひやうと云ふは、ぬ自在をいふ。理と云ふは、事なり

振鐸遊于市對人每日

澤とい金口木舌

りて舌は木あり。鈴乃舌もかねなり。形象は相似なり。

振るとはふり動して音を出すをいふ。其音とともに

となへられし言なり。市街又出て諸人に対する

度ごとに、左のごとく語られしなり。

鐸 金口木舌

明頭來明頭打暗頭來暗頭打四

方八面來旋風打虛空來連架打

是普化せんどの語小く。即虚無偈乃杖則とすは
第一義あり。是哉さげば第二義にたの。志うれども

志うらく和してまを志うれども。まの明取ある
ころおとい。あうらさるに來ころばあかきゆり

おてやらふ。くはまに來ころばあかきゆり
やらふあり。頭の字を解するは出やひがいらおと

ひふ義之。漢來れい漢現ど胡來まば胡現る乃い
あり。あうらさるる場形はあはらた。くはま

(p 69)

これ普化禅師の語にて、則、虚無僧の本則とする

第一義なり。是をとけば第二義に落つ。しかれども、

しばらく和してその故をしらしむ。まづ、明頭來・明

とう打とは、あからさまに來たらば、あからさまに

打てやろう。くらまぎれに來たらばくらまぎれに打て
やろふなり。頭の字を付たるは、出やひがしらに打と
いふ義也。漢來れば漢現じ、胡來れば胡現するの心
なり。あきらかなる場ならば、あらかに、くらきところ

張伯

鐸音模索圖





(p72) ならばくらまぎれ。我法は明暗にかかはらぬぞ、男女
・ 貴賤・賢愚にも、心のあきらかな、心のくらきにもかかはら
ぬというを、暗とうらいや・あんとうだとはいふなり。四

方八めんらいや、せんふうだとは、四方八面よりくると
きは、つじのまふがごとくにうつとなり。是、市町
に出られたる故、つじかぜとよびかけての説法なり。

こくうらいやれんがだとは、こくうよりくるときは、
からさほにて、むぎをうつようにうつとなり。この
かつというつえはことの外にありがたき杖なり。

此語が即、人をさとす杖にて、万人のねぶりを覺す
よびこえなり。一切衆生、皆明暗のうちに生死出入
するをあはれみ、老婆心切の托鉢よせて万物をして、

あらばくはづれ。我法と暗昧ふかやうぬそ男女
貴賤賢愚にも心のあきらかな。心乃くさふもかやう
ぬとつて我。暗昧とらひやあんとうだとははりあり。四
方八めんらいやせんふうだとは四方八面ありくると
きは。ほど風乃ほふごとくにうつとあり。是市町
小出られるを。ほどくせとよびつけては説法なり。
あくららいやせんふうだとは。こくうありくるとあり。あ
らさほひそ。むぎ杖うらやうに。うつとあり。あめ
つじとあり。ほそはあそれあり。ありがさき杖あり。
け語が即人をさとす杖なり。人乃祐あり我覺を
よびあ急なり。一切衆生皆明暗のうちに生死を入
するをわづれ。老婆心切の托鉢よせて万物を

成佛ありしむと。宗門乃道よりそ。禪法成
はるび。明師にあらまといひく知るべし

イチニチ カナニ チヤウ ハシナルモノ キイテコノ ゴラオホイニシタラ
一日 河南府張伯者聞此語大慕

セキトク
碩徳 一日とはあると時。かゝる人ちん
一志は内地名なり府の府城のともありて

城下の町人なり。姓は張名伯といふ人あり。官人あり。志
あるは。法を志す。志の好まき所ありしを。

何るまふふことば我々に。おほいませきとくを
志すふ。碩も大ありといふ心まで。法ある人と言

あり。其乃法乃言小あつたを。張伯も禪機
あるは。法を志す。志の好まき所ありしを。

(p73) 成仏なさしむと也。宗門の道に入りて、禪法を
まなび、明師にあふてくはしく知るべし。

一日とはあるときといふこと也。かなんはちん
しうの内の地名なり。府は府城のことにて、

此城下に、姓は張、名は伯といふ人あり。官人にてはなし。
城下の町人なり。此語を聞、とは、普化禪師の唱へ

あるき給ふことばを聞て、おほいにせきとくを
したふ也。碩は大なりといふ心にて、徳ある人は言

あり。其道徳の言にあらはれたるを、張伯も禅機
ある故に、徳をしたふ志のふかき所、あらはれたり。

(p 74) これにじうゆうせん事をこふ、とは、ふけ
 ぜんじにしたがひ、あそばんことをこへども、ぜんじゆるさ
 ず、とは「いやいや」といふて、ぜんじがのみこまれざるなり。

ちやうはく、かつてくはんをたしなむとは、張伯、まえかたより、いろいろの笛を
 好んでよく吹し人なれば、ぜんじの鐸音を聞に及で、とんに
 くはんをせいして、これをもすとはぜんじのふりひびか
 せし鐸の音を聞て、其おとを吹出さんとおもへども
 いろいろの笛の内にて、鐸の音をふくべき笛なし。それゆへ、

請從遊之禪師不許クニシ
クニシ 請從遊之禪師不許クニシ
クニシ 請從遊之禪師不許クニシ

ぜんじにあそぶがひ。あそばんことをあくどもぜんじゆる
 さずといいやくといふて。ぜんじがのみこまれざるなり

張伯嘗嗜管及聞禪師鐸音而頓トニニ
クニシ 張伯嘗嗜管及聞禪師鐸音而頓クニシ
クニシ 張伯嘗嗜管及聞禪師鐸音而頓クニシ

制管而摹之モス
クニシ 制管而摹之クニシ
クニシ 制管而摹之クニシ

好んでよく吹し人なれば、ぜんじが笛音を吹ふ及で、さんま
 くらんをせいして、これをもすとはぜんじがふりひびか
 せし鐸の音を聞て、まおとを吹出さんとおもひども
 いろいろの笛の内より鐸の音をふくべき笛なし。それゆへ

にハウマ竹を新あたらま切て笛を偲おもひ。吹て見れば。鉄てつの音乃
出る笛を偲おもひ。其音たまましく。そらよかふひきる也

たく乃音を ツ子ニモチクシデソノ インヲ 恒ニ弄其音而 モス 不敢吹他曲 アエテ フカ バツトヨクヲ

はよま音をろして。あててふきよくをゆかきとい
その徳を志こころざしふむらんとす。鐸たつ音をうたむる

をそて何そんで。かうたるうりてぬりざり。一幸。
ほるとに志こころざしふうく。妙哉めづゆるる。あに歌うたれつを

以モツテ管クハナヲ為ナシテ鐸タク音イニト故コト號サシ為ガウ虚イヌ鐸キヨ ナツケニナス

をあす。かるがゆへ。かかしてきよたたくをす。その
竹たけ吹てたく音をぬく也。あつけて笛ふえと志こころざしする

(p75) にわか竹を新に切て笛を作り、吹て見れば、鐸の音の
出る笛を得たり。其音たへにして、こころにかなひけるゆえ、たくの音をうつし得たり。

つねに其音をろうして、あへてたのきよくをふかずとは、
その徳をしたひおもんじて、鐸韻をうつしたるばかり

をもてあそんで、ほかの事はかつて吹かざりし事。
まことに其志ふかく、妙を得たる事ここ顕れたり。

くはんをもつてたくいんをなす。かるがゆへに、がうしてきよたくとすとは、その
竹にてたく音をふくゆへに、なつけて笛の名としたる也。

(p76)々もつて其家につたふる。十六世とは

代々張伯が家に子孫に伝へ来りて、十六世を経たる事也。

張伯より子の張金に伝へ、又其子の張範に伝ふ。其子張權、字

大量といふ。張亮、張陸、張沖、張玄、張思、張安、張堪、張廉、張産、

張章・字子操、張雄、是にて十五代なり。十六代目張参なり。

その名はさん。さうねんにしてすでに其音にしゆくすとは、張伯より十六代目の

孫の名を張参といふ。年三十を壯年といふ。其じぶんに

右のきよたくの吹やうをおぼえて、他にすぐれてよくふき

たりといふことを明せり。此張参が時は、唐の代並に後梁・

唐鑑

卷之十

世以傳其家十六世

代よりつて其家
はる。十六世と

代く張伯が家より子孫に傳へ来りて。十六世を経るるに

張伯より子の張金に傳へ又其子に張範に傳へ其子張權字

大量といふ張亮張陸張沖張玄張思張安張堪張廉張産

張章字子操張雄是にて十六代目張参なり

孫名参壯年而既熟其音
その人の名は
さん。さうねん

小くしてすでに其音に熟すすといふ。張伯より十六代目乃

孫の名を張参といふ。年三十を壯年といふ。其じぶんに

右のきよたくの吹やうをおぼえて、他にすぐれてよくふき

たりといふことを明せり。此張参が時は、唐の代並に後梁

張

中國の
クハタス
ハ参ガ

護國寺
押を以て
へて了た

法燈園
師も
ニミに
きて了た

後唐。後晋。後漢。後周乃
五代を経て今ハ宋レ代也 且爲性嗜佛教到

舒州靈洞護國寺學禪于寺僧

ゆりきやうを多しむるに云。張參が性質佛に
をふく好之。舒州といふは乃中に靈洞とて名高

さるは護國寺といふ寺のなるにあり。出家のせも居士
て性。禪法を寺僧まゐりて寺僧といふ寺の和尙あり

寺小入て學ぶるあり 本邦僧學心者亦

游學于此 唐宋の時代ハ日本より多く相學びの

(p77) 後唐・後晋・後漢、後周の五代を経て今は宋の代也

かつせいぶつきようをたしむがためには、張參が性質仏のおしいえ
をふかく好みければ舒州といふ国の中に靈洞とて名高
き所に護國寺といふ寺あるにより、出家はせねども居士に
て往て、禪法を寺僧まなびし也。寺僧とは寺の和尚なり。
もろこしにては居士にても寺に入て學ぶ事多きなり

ほんほうの僧とは日本の僧といふ事なり。
唐宋の時代には日本より多く物學びの

宋舒州

靈洞

護國寺



日本

学心入

宋学禅

宋学禅

学心入

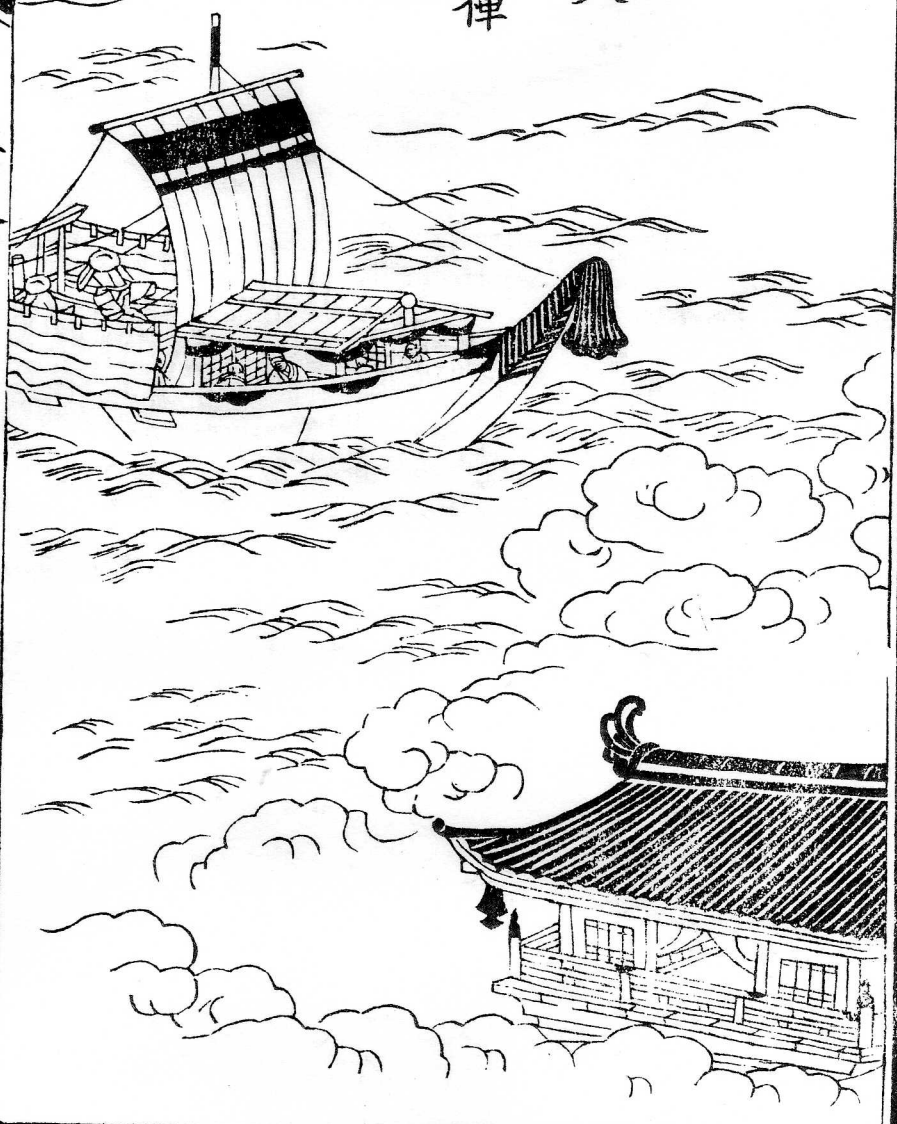
日本

学心入

宋学禅

日本

学心入



(p80) 為に入唐・日宋とて、僧俗の内にて勝れたる人を遣はせし事なり。或は公辺へ願ひて入宋せし人も多かりしなり。学心は僧の名なり。こたここに遊学すとは、此学心といふ僧も、其おりから入宋して、彼護国寺に掛錫して禅法を学び居られしという事なり。此にとは寺をさしていふ。

どりがくあひしやうわしてとは、同じく禅を学ぶ事なり。ことに万里の蒼波をしのぎ来りて学ぶ、学心なれば、志を感じあひたる事、言外にあらはれたり。相とはたがひにのころなり。唱和すとは詩を作れば和韻をし、文章は互に琢磨する事なり。

参と友としよとは、あまた僧・居士あるうちに、学心と

月鏡集

卷之三

(ノ遺)

此

小入唐入宋とて。僧俗乃勝れたる人とをいせし
るあり或も公邊へ願ひて入宋せし人も多かりしなり

学心の僧の名あり。ゆゑこゝに掛錫せし僧は学心といふ
僧も。まかりから入宋して。彼護国寺に掛錫して禅法を

学び居られしといふ事
はよとては寺をさしていふ
同學相唱和而與

参友善
どりがくあひしやうわしてとは、同じく禅を学ぶ事なり。ことに万里の蒼波をしのぎ来りて学ぶ、学心なれば、志を感じあひたる事、言外にあらはれたり。相とはたがひにのころなり。唱和すとは詩を作れば和韻をし、文章は互に琢磨する事なり。

参友と友としよといふ事、あまた僧居士あるうちに、学心と

参友と友としよといふ事、あまた僧居士あるうちに、学心と

る(流)

蒼

。。

張多とあるに心安く。一時閑話之次語

及先世傳虚鐸今尚存其曲事且

調之弄之一奏入妙

ついでとある。あづた。四方山は...

今あをまよふくを失わざと...

及ぶと。あつと。ついでと。虚鐸と...

(p81) 張参とことに心安也。交り深かりしといふ事也。

いちじとは、ある時といふ事也。かんわの

其時の知識普化禅師に見へ、きよたくをつたへ来りて

及ぶとは、ようすありて、虚鐸といふものを伝へ来りて

(p82) これをちようし、これをろうすと、とくと音しめを
あはせ、吹たるに、其一なかでのふきやう、ねいろの妙に
して、おもしろき事を、一奏入妙とはいふなり。

がくしん、いっしやうさんたん、きざしつこうしていわくとは、学心ことのほか
感に堪かね、一賞とは一たび賞翫しほむる事なり。

三歎とは、「ああ、妙音かな」と二度声を發て、さても
おもしろき事やと。座をなをすを跪坐
といふ。ひざにて近づき寄るをしつこうすと云

あれをてうし。あれをろすとい。とくと音しめ
あはせ。吹たるに。其一なかでのふきやう。ねいろの妙に
して、おもしろき事を、一奏入妙とはいふなり。

一奏入妙とはいふなり。学心一賞三歎脆

坐膝行曰 かくしん。ろすとい。とくと音しめ
あはせ。吹たるに。其一なかでのふきやう。ねいろの妙に
して、おもしろき事を、一奏入妙とはいふなり。

感に堪かね。一賞とは一たび賞翫しほむる事なり。
三歎とは「ああ、妙音かな」と二度声を發て、さても
おもしろき事やと。座をなをすを跪坐

といふ。ひざにて近づき寄るをしつこうすと云
奇哉

妙哉世之於象管未聞如此清調

妙曲可賞可愛者伏請教授一曲

長傳妙音于日本

きなるうみめうあまうあま
い。おもくやうたよたへある

きりううるといふる。世はあまうくりんよおひるま
かくれ如き。せいのちやう。うううううをますよのまを

本國あても種々様々なるふきをもちて。けうも
れあまも見す。又けやうにまやうあ。あなるあま

やうをさうず。あまうまう。あまうまう。あまうまう
あまうまう。あまうまう。あまうまう。あまうまう

てあまう一曲をおい。あまうまう。あまうまう。あまうまう
日本をう。あまうまう。あまうまう。あまうまう

ナガクツタヒニ
メウランラ
ニツホニニ

(p83) きなるかなめうなるかなとは、扱も扱もふしぎにたへなる

音いろかなといふ事也。世のしやうくはんにおけるいまだ
かくの如き、せいちやう、めうきよくを聞ずとは、是迄我

本国にても種々様々のふえをも見たれども、此かたち
のえも見ず。又此やうにすみやかな、妙なるふき

やうをきかず。しやうすべく、あいすべきものをとは、まことに
しやう美して、もてあそぶべきものなりとなり。ふし

て願ふ一曲をおしえさづけ給はば、ながくめうおんを
日本迄に伝ふといふものなりと念比に願ふ事也。

(p84) ここにおいて、学心のこふが為なり。ふたたびこれをそうすとは、学心に聞さんがために、又吹し也。これをしてとは、学心をして、これをまなばしむとは、此曲調を教へて習はしむるをいふ。

学心これをまなぶとは、虚鐸の音を学ぶ也。日ありとは、学ぶ日を重ねたる也。禅すでにじゆくすとは、禅学参禅も能心に入し事也。曲すでに成とは、きよたくもよくおぼえてそれより、日本国に帰らんとて、張参に暇乞して

於此為學心再奏之使之學此ライテコ、ニタメニカクシニノフタビソウシラシテコレヲマダバコレヲ
ムニレ

て。学心のあふるあり。ふたたびあきをそうす
くは。学心に聞さんがために。又吹し也。これをしてとは

学心をして。これをして。虚鐸の音を学ぶ也。日ありとは、
け曲調を教へて習はしむるをいふ 學心學之有ミナブココレヲアリ

日禪已熟曲已就而告别于張参ヒゼンモステニジユクシキヨクモステニナリテツゲテワカレラチヤウサンニ

学心これをまなぶとは、虚鐸の音を学ぶ也。日ありとは、
学ぶ日を重ねたる也。禅すでにじゆくすとは、禅学参禅も能心に入し事也。曲すでに成とは、きよたくもよくおぼえてそれより、日本国に帰らんとて、張参に暇乞して

も能心に入し事也。曲すでに成とは、きよたくもよくおぼえてそれより、日本国に帰らんとて、張参に暇乞して

舒州乃護國寺城也。舒州乃津港也。辭舒州而解纜于

明州南宋理宗帝寶祐二年歸船

于本邦于時 後深草天皇建長

六年也

州よりそくとは。明州の津港に赴かんとする。唐宋乃時
ありは渡り所あり今に寧波も明州のうちにあるこ
ろありあり。本朝より渡海にも便りよき地なれば帰棹の
時を以て不置しき也。此時の帝は南宋に理宗皇帝と

D85

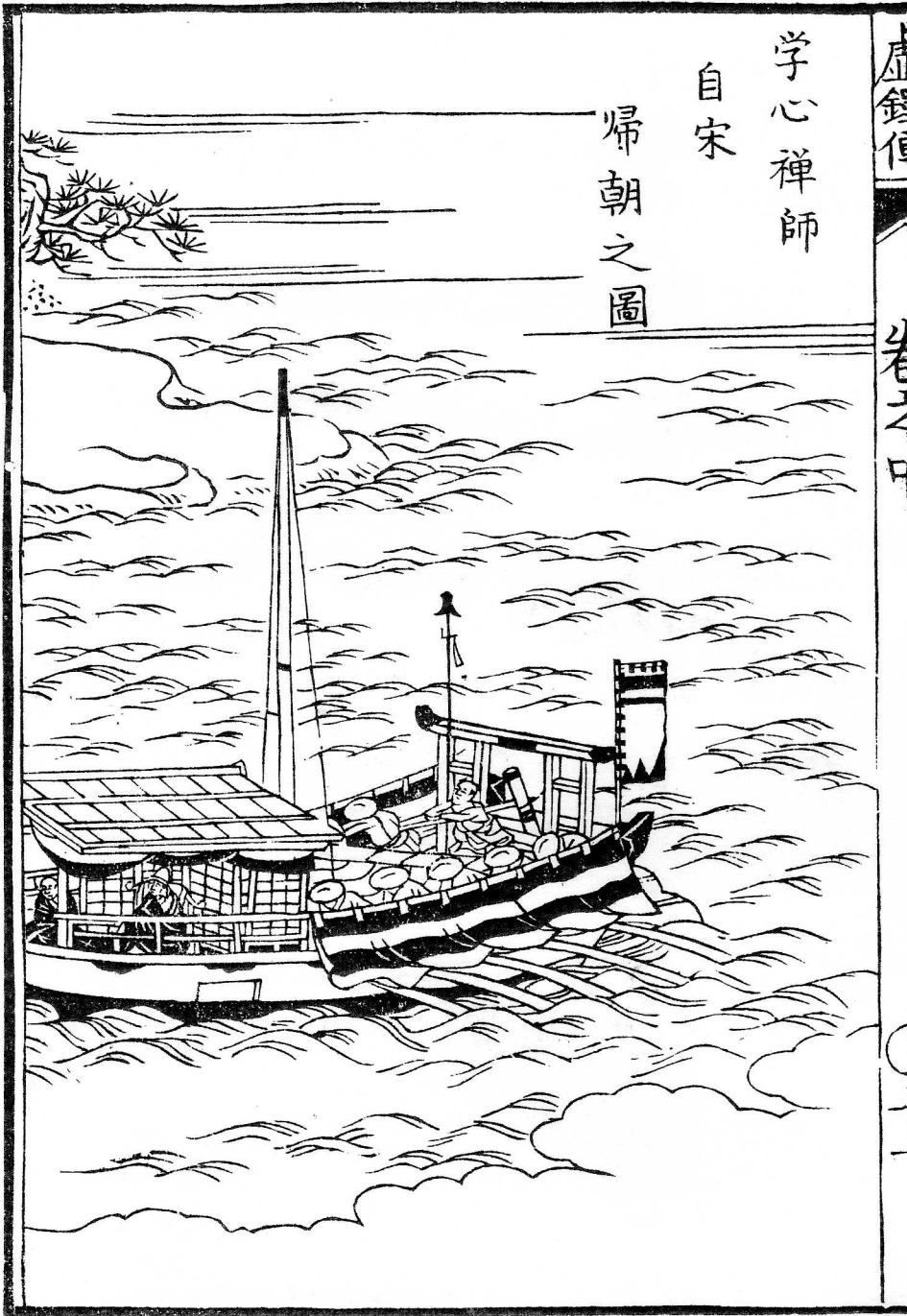
舒州の護国寺を出て、明州の津湊に赴かんとする。

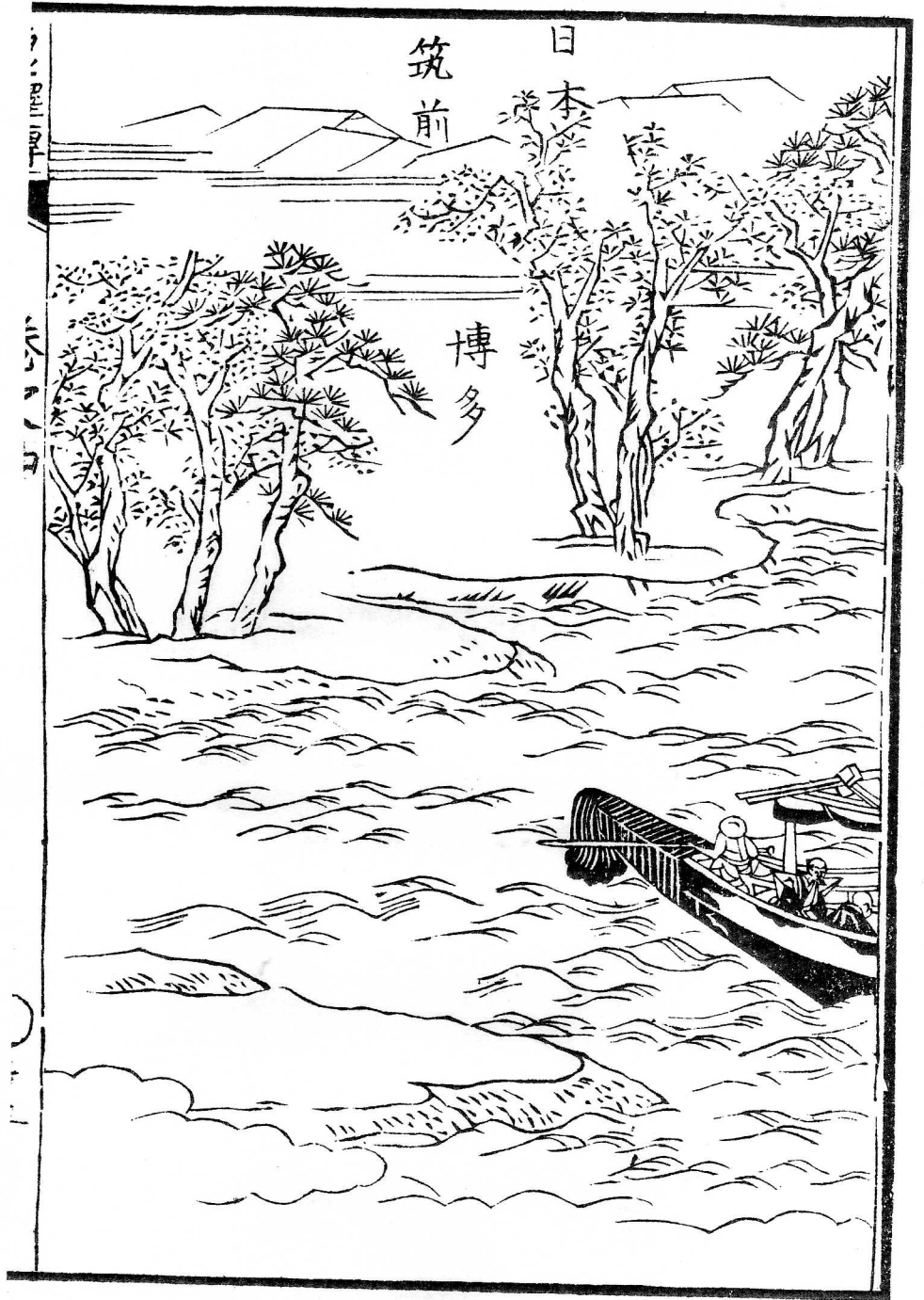
じよしうを辞してとは、護国寺にて、みなみないと
まごひして出られし事なり。ともつなを明
州にとくととは、明州はもろこしの濠口にて、唐宋の比
よりの渡り所なり。今の寧波も明州のうちにあると
覚ゆる也。本朝より渡海にも便りよき地なれば帰棹の
時も此所宜しき也。此時の帝は南宋にて理宗皇帝と

学心禅師

自宋

歸朝之圖





(p88) 称し奉る。ほうゆう二年は、其時の年号なり。すでに
彼土を跡に見て、ともづなをとぎ、風波をしのぎ
日本に帰り、つきてみれば我朝のみかどは後深草天皇
にて渡らせ給ひ、けんちやう六年に帰朝せしといふ事也。

これよりかくしんある時は、高野山にわけ入て心を
すまし、又ある時はみやこへも折々出られしを洛陽城
に入といふ。洛陽は、もともろこしの都の名なり。しかれども
かり用ひて、此方にて称し来れり。此方の都は平安城といふが本名也。

歴代信

卷之四

(一)

欄一 なる。わくゆへ二年へ。まの年号あり。すでに
彼城跡にる。ともづなを城せ。風波をしのぎ
日本に降り。ほきてるれば我朝乃みごとく後深草天皇
にて渡らせ給ひ。けんちやう六年に帰朝せしといふ事也。

自是學心或入高野山或出洛陽

城 此れより。かくしんある時は。まの年号あり。すでに
彼城跡にる。ともづなを城せ。風波をしのぎ
日本に降り。ほきてるれば我朝乃みごとく後深草天皇
にて渡らせ給ひ。けんちやう六年に帰朝せしといふ事也。

又入る。洛陽は。もともろこしの都の名なり。しかれども
かり用ひて、此方にて称し来れり。此方の都は平安城といふが本名也。

本名也 道遊有年造立一寺于紀州

尺八を習った覚心(法燈国師)は紀州の西方寺(興国寺)に住んだ

號西方寺而終住于此

年光のおろしうつるをらふ。はれが一つのものを紀州の内よ
つくりまゝ。西方寺とあつた。げんよまはるまゝし之此

寺より由良とい 以其碩徳世號大禪師

弟子日益進

うり。執腕(重)かき取り。法業みち足り。禪機ありなる
ゆへ。世の人稱羨し之。禪師と号せし。弟子日に

はすくもむとは。またも近きもつきまゝびて業成
うけ。禅学はなふふり集る。弟子は僧。日にまゝて多く集る

(p89) しょうゆう、としありとは、ずらずらと
年光のおしうつるをいふ。されば一つの寺を紀州の内に
つくり立て、西方寺となづけて、此所にすまれし也。此
寺は由良といふところにあり。

臘

そのせきとくをもつて、世大禪師と号すとは、学心帰朝せられて
より、年臘かさなり、徳業みち足り、禪機ありける

ゆへ、世の人称美して大禪師と申せし事也。弟子日に
ますますすすむとは、遠きも近きもちきしたがひて業を
うけ、禅学の為により集る。弟子の僧、日にままして多く来りし也。

孝(遠) 法(徳)

覚学

(p90)とちゆうとは、学徒とも、徒弟ともいふ事にて、弟子のなかにといふ事也。あまた多き弟子の中に也。

きちくなるものありとは、其あまたの弟子のうちに、きちくといふ僧ありけるがといふ事也。

ぜんしんことにせつなるをもつて、師をけいする事ますますはなはだし

とは、参禅の心ことの外に親切なるゆへ、師匠をうや

まう事もますます日にひたがひはなはだしき也。

徒中

とちゆうとは。学徒とも。徒弟ともいふ事也。弟子のなかにといふ事也。あまた多き弟子の中より

有寄竹者

さちくちゆうのありといふ。其阿まきの

以禪心殊切敬師益甚

モツテゼンシンニコトサラセツナルラケニスルニシラニスク

たるをりつて。師をけいする事ますますはなはだし

學心亦親昵之異

ガクシンニモニタニシニギツスルコトニ

于他弟子一時學心告之以在宋

タラテイニシニイチガクシンニツクルニコレニモツテニアリニ

徒中
弟子
中
學心

覺心は空を弟子「密り竹」に尺八を伝えた。

之時傳得虛鐸音今尚能調之且
トキニ ツタヘ エテ キヨ タクノ インラ イマ ナラ ヨク テウスルラ コレラ カツ

謂欲長授于汝而嗣此之傳
カタルラ フモフトホカク サツケテ ナニヂニ ツカシメトコフ テンゾ
かくも人も
上これを書

んどらあること。たのてーにあとありとい。こもくぐさおが
ゆらおんをひく。うやまふものも。故。かくも人もこれ
あふーも。むつまづうせもも。おは弟子をうもあふに
ふ後かひーとあり。いちどかくも人もはるふ。宋
にありー時きあふくこれんをほくして。いまあをよく。是
をちやうするもをりつてすこい。あると記かくも人がき
ちくにもあふはほいでにやされふ。われむら宋の
國よつり。禅学せし時。張参といふ人より。こもたくと

p 91

かくしんもこれをしんじつすること、たのでしにことなりとは、きちくがことの外
まことの心を以て、うやまふものなる故、かくしんもこれ
したしみ、「むつまじうせらるる事。外の弟子よりもことに
よるしかりしとなり。いちじがくしんこれにつぐるに、宋
にありし時、きよたくのいんをつたへて、いまなをよく、是を
ちやうする事をもつてすとは、あるときがくしんがき
ちくにはなしのついでに申されけるは、われむかし宋の
國にいたり、禅学せし時、張参といふ人より、きよたくと

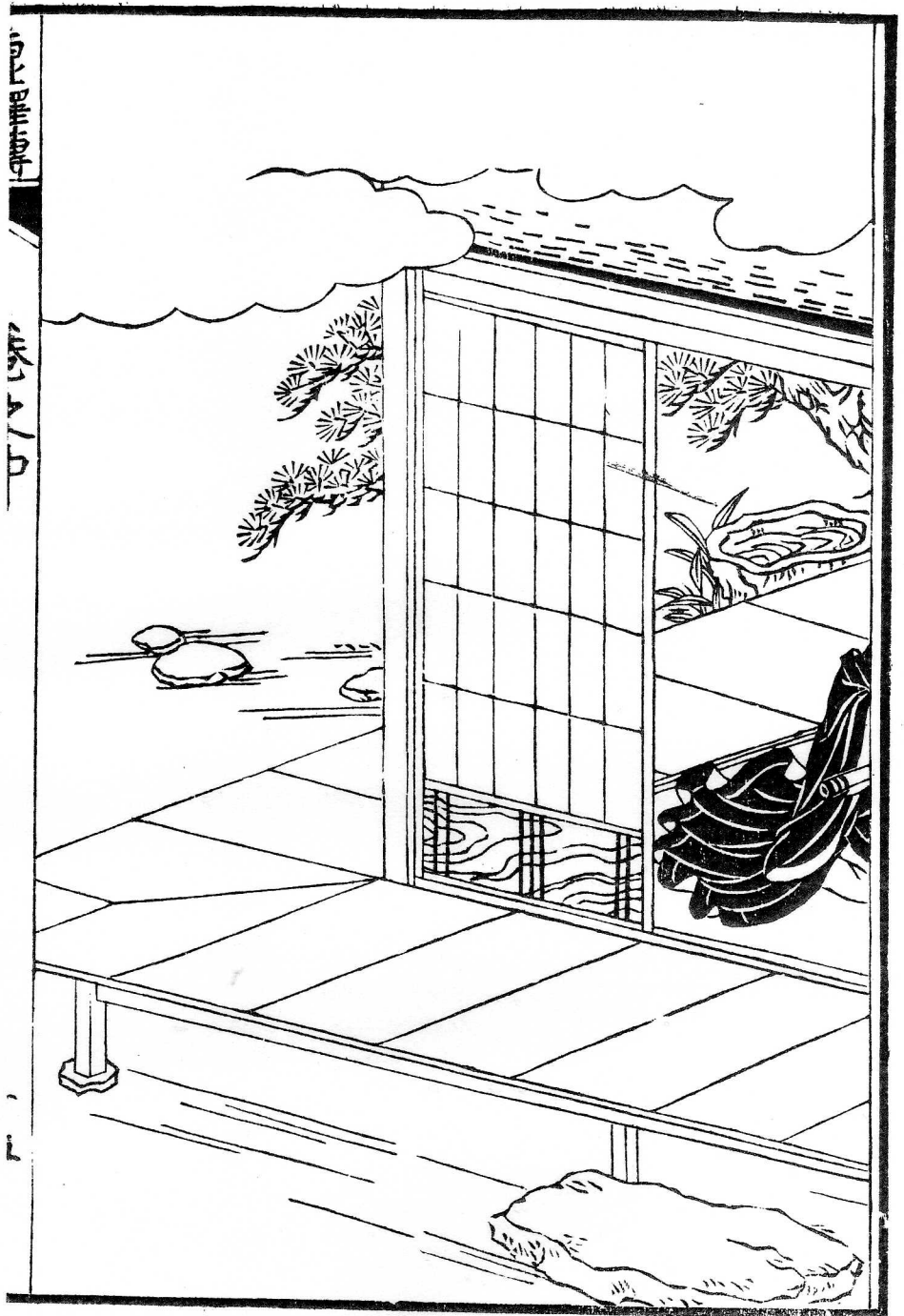
寄竹受虛鐸圖



十四

↑
竹

↑
案



(p94) いふものをならひしが、今にその吹やうをよくしりて居ると語らる。かついふなんじにつたへて此いんをつがしめんとほつす、とは、其うへおもふに、なんじに此きよたくをさづけおしへて、永く此伝をつがしめんとおもふなりとありしかば、

きちく、ゆやくはいじゃしとは、ときに、きちく、師の仰をうけてよろこぶ

にたえず、ゆやくとおどり上り、これはありがたき仰

かなと、うれしくおもひ、三拝して礼をなし此調子

をならひうけ、よくよく覚へじゆくし、毎日毎日おこたらず

禅のいとまには、もてあそびて、すきこのみけるとなり。

いふものをあつひいひが。今にその吹やうをよくききて居ると語らる。つらふあんどにつていていんを。はがあんとなつこととは。まゝ人ありふに。あんどにはさうさくをほつておしへく。永く此傳をはがらんといふありとありしなり

寄竹踊躍拜謝傳此之音熟習嗜

弄日不置
ロウ ヒビニ ズ
レ ヲカ
まぢく。ゆやくといふやうとハ。とねえ。まぢく。原乃伝をうけて。まぢく。

にうえず。ゆやくとおどり上り。あつひいひが。つらふあんとなつこととは。まゝ人ありふに。あんどにはさうさくをほつておしへく。永く此傳をはがらんといふありとありしなり

他弟子國作理正法普宗恕四人

亦能學此管世稱之四居士

里志也。ほろふ。そうじよの四人も。ほろよくふ乃
くまんをほろふ。せよろれを。あざとと志やうせよは。

こちくがかに四人の弟子あり。くろく。里志也。
ほろぬ。そうじよ。といひーのをも。さあたくせまん

哉このんで。ぬきさきしーが。いづれもよみちり。
其ころ乃人。あまし哉四居士を志やうしける。

後年寄竹以行脚之志告暇且請

たのでし、こくさく、

りしよう、ほろふ、そうじよ、の四人も、またよくこの

くあんをまなぶ。世にこれを、しこじとしやうずとは、

きちくが外に四人の弟子あり。こくさく、りしやう、

ほろふ、そうじよ、といひしものも、きよたくのくわん

をこのんで、ふきならひしが、いづれも上手なり。

其ころの人、これを四居士としやうしけると也。

(p96) こうねん、きちく、あんぎやの志を

もつていとまをつけ、かつどう路

ごとに此いんをはつして、わうらいのためにし、世人を

して、此めうをんをしらしめんとはつすとは、しかりし

後、きちく諸国をあんぎやのぞみにて師匠に

いとまをねがひ申しうけて、人の家ごとにおもてにて、此

きよたくをふきて、世間の人に聞かせん事をねがひし事也。

がくしんのいわく、よいかたなこころざしやとは、まこと

虚録傳

卷之四

十六

道路每戸發此音以爲往來使世

人知此妙音甲

こゝろにけつんをまろして。わうらいのたれふ。世を
しそ。けめうをんをあらうめんとはつすとは。まこと
後。きちく諸国をあんぎやのぞみにて師匠に
いとまをねがひ申しうけて。人の家ごとにおもてにて。け

きよたくをふきて。世間の
人よまをせんをねがひし事也
學心曰善哉志

也
がくしんのいわく。よいかたなこころざしやとは、まこと
にあつたふどそれいよからふ。よいかたなこころざしやとは、まこと

覚心の弟子「空行」が道路上で修行を、又、尺八を吹かして

くまんと吹て。人乃心をたのしむるも後修業
乃まんとぬり。心をすめを程とあることなり

於此直發紀州無日到于勢州朝

能嶽上虚空藏堂下

て。ひかくせいりうあさはぐたけのふにあり。こころざ
うたうせりらにゆるるとい。あぢちにはすぐとつふん

形り。ふりとい。衆生しそまをゆき。通夜抽

凝丹誠脆拜及五更

(p97) くわんを吹て、人の心をたのしましむるも讚仏乗
のえんと成り、心をすます種となるといふ心もこもれり。

ここにおいて、ただちにきしゆうをはつし
て、ひなくがたけのうへにある、こくうざ
うたうのもとにいたるとは、ただちにはすぐといふ心
なり。はつしとは、発足して寺を出る事。ひなくとは、日数なくほどなくなり。

つやし、たんせいをぬきんでこらすとは

一行

(p98) こくうざうぼさつのどうのもとにこもりて、通夜する
なり。たんせいをぬきんでこらすとは、丹はあかきなり。

人の心の臓は火にたとへて赤しとす。心にまことあるを
丹誠といふ。ぬきんでとは、心を一つにして、ぬき出して

二心なき也。こらすとは、一つにあつむる心、他念なきと云。
きはいと、拜しおがみてはざし、ざしてははいする事也。

ごこうに及ぶとは夜もふけて、七つの比迄、ねぶらでいたりし事也。

まさに、すこしねぶりにつかんとす。けんぜんとして、れいむありとは、夜もふけし
ゆへ、まどろまんとは、思はねども、少しねぶりのきざし
たるに、誠にかんじてや、こくうざうぼさつのれいむを

居録

卷之四

十一

ふくろざうぼさつらうざうぼさつにこもりて。通夜する。
あり。たんせいをぬきんでこらすとす。丹とあるはあり。

人乃心の臓は火ふとて赤しとす。心は赤くあるは
丹誠といふ。ぬきんでとは、心を一つにして、ぬき出して

二心なき也。こらすとは、一つにあつむる心、他念なきと云。
きはいと、拜しおがみてはざし、ざしてははいする事也。

ごこうに及ぶとは夜もふけて、七つの比迄、ねぶらでいたりし事也。
まどろまんとは、思はねども、少しねぶりのきざし

然有靈夢 ゼンツアリレイム ぼさに。まこー。祓ありにつんとなん。けんぜん
とく。まどろまんとは、思はねども、少しねぶりのきざし

ゆへ。まどろまんとは、思はねども、少しねぶりのきざし
たるに、誠にかんじてや、こくうざうぼさつのれいむを

将少就眠顯 マサニスコクツカト子ムリニ

蒙るありけんせんせは。海上掉小船獨賞
まぎくまゆめをるる

明月頓朦霧蔽而月色暗暗焉
メイケツラトニモウ ム ラフテ ゲツ ショウ アン アン エンタリ
上よ

小船にさほけし。ひとりめいづつをまやうとんとんに
りしむおつる。霧しそ月色あんくつりし。おもたふ
とふる。これすふちまむむる。そふおりしそ
る。きちくゆめんに。小船にのりて。うみうま。うま
たるに。おふし月いと清らうた。そり満る。友もなれども。
月を羨敬して。詠め飛るに。ふいにうらま。霧が
かまれば。かのうらうの月の色もひかりかして。うら
形りしと見たり。夢心まぎくくに。かりめをかくる

(p99) 蒙るなりけんせんとは、まざまざしうゆめを見る也。

かい上に小船にさほさし、ひとりめいげつをしやうず、とんに
もうむおおはる。然して、月色あんあたりとは、ゆめのてい
をいふなり。これすなはちれいむなり。其ていおもしろき
事也。きちくゆめ心に、小船にのりて、うみのうへに、うかみ出
たるに、折ふし月いと清らかに、てりまされり。友もなけれども、
月を賞翫して、詠め居たるに、にはかにけしきかわり、霧が
かかりければ、ほのぐらく月の色もひかりをかくして、くらく
なりしと見えたり。夢心しばらくに、かはり行をかくするす。

勢州朝熊虛空藏堂

寄竹得靈夢

獲妙曲圖



明月映水

山水册子



むちう、くはんせいはいはつして、れうれうこえ
こうこうたりとは、其きりの中に、笛のけがして、れうれう
とものさみしく、又こうこうとひびきわたりて、たへにめづら
しき事、いひものべられざりし事也。その音いろいふにいはれ
ぬおもしろしといふ義也。きくにあかず、耳をすまして
居るうちにしばらくして、ふえのね、やみし事也。

霧中管聲發而寥々浩々妙音不
ム チウ クワン セイ ハツ ミテ レウ ク コウ ク メウ クワン ズ

可言焉須臾而管聲斷
ベ カ ラ イ フ コ ニ シ ユ ニ テ クワン セイ タ ク エ キ リ ク

とりのさみしく。又さうくとひびきたるなりて。さよめつ
しき事。いひものべられざりし事也。その音いろいふにい
ぬおもしろしといふ義也。きくにあかず、耳をすまして
居るうちにしばらくして、ふえのね、やみし事也。

霧中管聲發而寥々浩々妙音不
ム チウ クワン セイ ハツ ミテ レウ ク コウ ク メウ クワン ズ

朦霧漸々凝結而
モウ クワン ゼン クニ ギ ケツ シテ レ

爲團々焉一塊塊中又管聲發奇
ナル クワン ク タル イツ ク クワン セイ ハツ ミテ レウ ク コウ ク メウ クワン ズ

聲セイ妙メウ音ラン世ヨノ之ノ未イダ可ヘカ得ラ聞エテ之キク者コレラ
ガレレニ之レ者レ ゼンク

小ありむとんで。だんくあんる。一くついとあると。そ
 こころが次次くふ。あつまりありて。一々の玉れとくに
 ありて。其くはいちう。あつらんせ。はうへきせ。
 めうりん。世のいまごまれをこくろをうううさるもの
 ありと。そ丸く形りする。こころの中あり。あつらん
 こゑが出る。其きいろいろいふ。こころなき。こゑもあつた
 らう。かんあんせしと。夢中チウ大感オホイニカン之コレラ欲ラモラニ

將モツノ虚キヨ鐸タツラ摸ボ倣ハカヒテ之ラスハチ則コツ忽エニト焉チムリ眠サメテ覺ム霧シクイ塊クワイ

p103

塊クワイ

もうむぜんぜんに
 こりむすんで、だんだんえんたる、一くはちとなるとは、其
 きりが次第次第に、あつまりよりて、一つの玉のごとく
 にこりて、其くはいちう、またくはんせい、はつしてきせい、
 めういん、世のいまだこれをきく事をうべからざるもの
 なりとは、其丸なりたるきりの中より、またふへの
 こえがでる。其音いろいろいまだ人のききえし事もなき
 珍らしくおもしろき調子かなと、かんしんせし事也。

むちう大にこれをかんにて、きよたくをもつて、是をも
 はうせんとほつす。すなはち、こつえんとして、ねぶりさめた
 り、むくはいせんとうことごとくあとなし。ただくはんせい
 の、みみにとどまるのみとは、きちくが其音いろをかんにずるのあまりに、
 きよたくにうつさうとおもふたれども、はやついに、一時の
 ゆめなれば、たちまちに、さめて、めがあいて見れば、こく
 うさうだうにて、きりもふねもさほも、皆々きえきえ
 となりて、ただふえの音が耳根に残りて、聞おぼへたるのみ也。

船掉盡無迹唯管聲之認于耳而

已 ちちう大よあれをかんにて。さよたくをりて。きよも
 うせんとほつす。すなはち。こつえんとして。ねぶりのさめた

里。むくはいせんとうことごとくあとなし。ただくはんせい
 の、みみにとどまるのみとは、きちくが其音いろをかんにずるのあまりに、
 きよたくにうつさうとおもふたれども、はやついに、一時の
 ゆめなれば、たちまちに、さめて、めがあいて見れば、こく
 うさうだうにて。きりもふねもさほも。皆々きえきえ
 となりて。ただふえの音が耳根に残りて。聞おぼへたるのみ也。

寄竹大奇之調弄虚鐸摹擬夢中

空の竹は、夢に聞いた二曲をもつて、覺心師（此のまゝに帰り曲名をつけてもらう）

トコロキシニキヨクヲオホイニカカリソノイニヲ
所聞二曲大得其音
こちかく大にこれをこ
とて虚鐸をてう

ろくして。あれ哉を記せよ。さうかくして此おふりきた
おのひて。さうたたくをきく。ゆえ其中に。さうする所

の二度乃者さうりして見るに。おほい其いんをきくと
は。ほいよまきやうをおひひ物してまに入る

於此直歸于紀州告夢及所得音
キニウニツダケユメヲヨビトコロノウルイニシ

于師且請命此二曲
キニカツコフメイゼンヲコノニキヨクニ
あくにわいてたがちて。記志うにゆり。ゆえ

おふびうととあゆみのいんを。しにきく。かつは二さよくに
めいぜんとて或るふとん。さうかくいこくうそ堂より

きちく大にこれをきとして、虚鐸を、てう

ろうして、これをもぎすとは、きちくことの外ふしぎに

おもひて、きよたくとしらべて、ゆめの中に、ききたる所

の二度の音をうつして見るに、おほいに其いんをえたりと

は、ついに其ふきやうをおもひ出して手に入し事也。

ここにおいてただちに、きしうに帰り、ゆめ、

およびうるところのいんを、しにつぐ、かつ此二きよくに

めいぜんことをこふとは、きちくはこくうそう堂より

虚鐸 竹 空

(p106) 下向して、外へゆかず。ふたたび紀州に帰りて、ゆめのおもむきを、つまびらかに咄して其ふきやうを師匠
学心禅師につげしなり。師嗣の間、禅余のふえにえたるも又奇なるかな。

後称法燈国師、者是也。学心禅師徳義宗乘みちしかば、後に法燈国師と称せられし事なり

しのいはく、ぶつじゆなるかな、さきに聞ところをむかいじとこうし、のちに聞所をこくうじとこうすとは、師匠
きちくの咄しもの語を聞て、きどくに思ひて、すなはち
吹かせて聞給ふと云を、りやくす、さきへ聞たる曲を、むかい

法燈傳

卷之十一

(二十一)

下向して。外へゆかず。ふたたび紀州に帰りて。ゆめのおもむきを。つまびらかに咄して其ふきやうを師匠

学心禅師につげしなり。師嗣の間。禅余のふえにえたるも又奇なるかな。 師曰 後称法燈国師

者是也。学心禅師徳義宗乘みちしかば、後に法燈国師と称せられし事なり 佛授哉先

所聞號霧海麓後所聞號虚空麓

志のいづく。あつぢもあつぢ。はりたまたまとをいひ
とあつぢ。あつぢにゆふをいひ。あつぢにゆふをいひ
さちくつ。あつぢにゆふをいひ。あつぢにゆふをいひ
吹せしやまのせとをいひ。あつぢにゆふをいひ

吹せしやまのせとをいひ。あつぢにゆふをいひ。あつぢにゆふをいひ

一と名付よ。後よすたる曲をこくうじとあつくべしと
 のまふ。ぶつぢゆなるかなとは、是こそ女が信心のしり
 るまふしにく佛がさつり 自後寄竹往復
 は例もあてあらふとまふ

通行之路 弄始所傳 虚鐸或應世

人強請 奇曲則弄 今所得之二曲

自後きちく。まうゆつしつるれよ。もめうつふ
 るとあ後乃きよたたくをろじ。あまひ。せんのまわ
 きよくをのぞむとき。今うはそてろれ二曲をろじ
 とは。其後ハきちく修行に知る心。きよたたく

P107

じと名付よ、後に聞たる曲をこくうじとなづくべしと
 の給ふ。ぶつぢゆなるかなとは、是こそ汝が信心のこりた
 るしるしにて仏ぼさつのさづけであるふとの給ふ。

自後きちく、わうふくつうこうの道には、はじめにつたふ
 るところのきよたたくをろうし、あるひは、せじんのしいて、
 きよくをのぞむときは、今うるところの二曲をろうし
 とは、其後はきちく修行に出るには、きよたたくを

ふきて聞せ、人の何ぞおもしろき事を聞せ給へと
のぞむ時は、^七かかいじこくうじの二つをふきしと也。

こうせいのそうと、これをしらずみだりに、きよくをろうして、もつて常となす。
きよたくを、きよくめいとして、是をきめいとせず、しか
のみならず、きのあひにたるをもつて、たくをてんじて

ふひてせせ。人乃何ぞねりしをせせまくと
のそむゆき。むふどくくうじハニをきしと也

後世セイソウ僧徒ソウト不知ズ之シラ妄弄コレラミダリニ二曲ロウニテニ以爲キヨクラモツテ

常虚ツチトキヨ鐸タクラ為曲ナシテキヨク名不メイトス為之セ器名キ加之メイト。ツウフニコレ

以器モツテキノ相アヒ似ニタル轉テニソ鐸タクラ為鈴ナシ稱虚レイトセウニテキヨ鈴トス為曲キヨク

大失オホイニウシラ古コ義ギに。こうせい乃そうと。それをあふむとみだり

こふたたくを。さうのくめいとして。是をきめいとせず。あふ
のそむゆき。まはあひにたるをきしと也。たくをてんじて

きよとちりて。まよひぬとまふして。さうくともを。おほ
 いよ。こぎ城うゝのりとも。世がすまはなるにきこひる。
 そまごもが此中まをしらば。ほひむふた。こくじを
 ぬいて。修りし。きよたくとつが。笛は多かるるまじ
 あつる。其上にくくとまひとくはるるものあは。
 ぶくとまひとちちる。まよひぬとまふして。さうくともを。おほ
 多ふしてまふして。かつコウセイノツウトカクズニ
 大よひのまけをじぬ。且後世僧徒各自
 ナシニシヲ ナシ キヲ セニ キヨク パン シユ シタカツテ イニハツス イシヲ ナヤ
 爲新爲奇千曲萬手隨意發音張
 ハクガ コロガシ コツ エントフ タヘタリ カナシヒカナ
 伯志忽焉絶矣悲哉 かつ。こくせいのもろく。あくどにまんを

p109
 カナシヒカナ
 かつ。こくせいのもろく。あくどにまんを

れいとなして、きよれいとしやうして、きよくとなす。おほ
 いに、こぎをうしなへりとは、世がすえになるにしたがひて、
 そうどもが此やうすをしらず、つねにむかいじ、こくうじを
 ふいて、修行し、きよたくといふが、笛の名なる事をうし
 ないける也。其上にたくとれいとよくにたるものゆへに、
 たくとれいと取ちがへて、きよれいといふて、ふきやうの
 名にしてしまふたり。大にいにしへのわけをうしなふ。

かつ、こくせいのもろく、かくじにしんを

なし、きをなし、せんきよく、ばんしゆ、意にしたがつて、こえをはつし、ちやうはくがころざし、こつえんとしてたへぬ。かなしひかなとは、後世の僧たち、各自とは、われもわれもいろいろの曲をふきだし、おもふ様に音をいだすゆへ、いにしへ、ちやうはくが鐸の音を、ふくためにこしらへしものにて、外の事をふかぬというて、

法度をたてておきし事たちまちにたへたり。是をかなしみ申されし事也。寄竹後称虚竹先生者是也。高德の人なり。

虚鏡傳 卷之中

(二十三)

あり。も錢あり。せんきよく。ばんしゆ。意にしたがつて。こえをはつし。ちやうはくがころざし。こつえんとしてたへぬ。かなしひかなとは。後世の僧たち。各自とは。われもわれもいろいろの曲をふきだし。おもふ様に音をいだすゆへ。いにしへ。ちやうはくが鐸の音を。ふくためにこしらへしものにて。外の事をふかぬというて。法度をたてておきし事たちまちにたへたり。是をかなしみ申されし事也。寄竹後称虚竹先生者是也。高德の人なり。

なり人 晩年在于洛東徘徊于皇城

終傳此音塵哉塵哉傳之儀伯儀

学心 (云々) 寄竹 塵哉 儀伯 臨明 虚風 虚無 構正

是の竹は京都で、この又八を儀伯に伝えた。儀伯は臨明に、臨明は虚風に、虚風は虚無
 伝えた。

伯傳之臨明臨明傳之虚風虚風

傳之虚無
フキヨムニ

大のりんをぢんさいのよけりて。きちくはとしよら
 るも。で。みやまのあまほろ。おろく王城の近き。幾

けんくわい。ゆききせられけるが。ついに虚擇。むふ
 ド。こくうじをぢんさいに。ぢんさいは。きよくに。

けんくわい。ゆききせられけるが。ついに虚擇。むふ
 ド。こくうじをぢんさいに。ぢんさいは。きよくに。

虚無即敏達帝後

きちくばんねん、らくとうにありて、

くはうじゆやうをはいくわいして、ついに、

このいんをじんさいにつたふとは、きちくはとしよら

るるまで、みやこの東に住て、折々は王城の近辺を

はいくわいして、ゆききせられけるが、ついに虚鐸、むかい

じ、こくうじをぢんさいにおしえ、ぢんさいは、きはくに、

おしへ、きはくは、りんめいにおしへ、りんめいは、きよふ

うにおしへ、きよふは、きよむにおしへし事也。これら

はまことに、じつをおしへつたへし事を明せり。



虚無初見
虚風之圖



江州
志賀里
虚風
住居

虚無は、虚風に羽るる如か。この虚無は、美は楠正勝たつた也。

きよむはすなはち、ひだつてんわうのこういん、くすの木
まさかつ也。なんてうびにして、いちもんことごとくほ
つしぬ。ぎ気れつなりといへども、ゆうしかうなりといへ
ども、ときのなすべからざる事をしり、ちつしてたん
かいの内にいり、きよふうにくはひして、此でんをつぐとは、
きよむは楠正勝にて有り。此時、南朝は後醍醐天皇

虚鑑傳

卷之四

胤楠正勝也。南朝微而一門盡没

義氣雖烈勇志雖剛。知時之不可

為塾入淡海之中。會虚風而嗣此

傳。きよむはすなはち、ひだつてんわうのこういん、くすの木

つしぬ。ぎ気れつなりといへども、ゆうしかうなりといへ

ども、ときのなすべからざる事をしり、ちつしてたん

かいの内にいり、きよふうにくはひして、此でんをつぐとは、

の御系ありしが。軍利ありしゆ。よしに御居。志
 だいにねとろへさせ給ひ南北和合の比なれば。くすの木
 是非なく。世成のづれり。忠義まををかさる。大勇
 けき活さしありとす。は時つくはと起しても。
 すぐたにかさむ。うゑい。ふらさるるを徒あり
 て。整たる。蟄居あて冬虫れともり。
 む。まゝとくにまづくともり居るるが。い
 くて有べきあれば。まづにを江の國に立越て。虚風
 あり。きよも。つひあ。士あれば。きよた。此傳
 をはら。きよ。きよ。是をうけて。時節をうかがひ。

不^ズ剃^{ソラ}髮^{カミラ} 不^ズ著^{ツケ}法^{ホウ}衣^エ服^{フク} 俗^{ゾク}衣^エ 不^ズ爲^{ナサ}文^{モン}

(p115) の御系なりしが、軍利なかりしゆへ、よしのの皇居、し
 だにおとろへさせ給ひ南北和合の比なれば、くすの木
 、是非なく、世をのがれたり。忠義に心をかためて、大勇
 のこころざしありといへども、此時いくさを起しても、
 すでにかたむきしうえは、よろしからざる事を能しり
 て、蟄したる也。蟄は蟄居にて冬虫のとちこもりたる
 事也。其ごとくにしばらくとちこもり居られるが、いつまで
 かくて有べきなれば、しづかに近江の國に立越て、虚風に
 あふ。きよふうも、つねならぬ、士なれば、きよたくの伝
 をさづけければ、きよむ是をうけて時節をうかがひし事也。

是はそれより、きよむが身のふるまひをかきし事也。其かたち、か
みをそらずとは、有はつの姿にて、坊主になる事をやめ

し事也。ほう衣をきずといふは、衣をきずして、俗衣

をきたる事也。ぞく衣とは、つねの人々のきるもの也。もんを

なさずとは、もん、もやう、しまるいをきざる事也。くはらを

うがちとは、くはらは小さき袈裟の五條あるをきる也。

略せるもありと見えたり。うがちとはかくる事也。べいのう

をいだきとは、今の三衣袋をかけし事也。くはんえうりふ

もつてとは、顔をおおふ為に、あみ笠の丸きをもつて、かくせし事也としるべし。

穿掛絡抱米囊莞圓笠以蔽面
ウカチクハ、ラライダキ、ベイノウラクワンエン、リフ、モツテ、ラヒヒラモツテ

あり。きよむが身ふるまひをかきし事也。まかち。か
こをそらずとは。有はつの姿にて。坊主になる事をやめ

し事也。ほう衣をきずといふは。衣をきずして。俗衣を

きたる事也。ぞく衣とは。つねの人々のきるもの也。もんを

なさずとは。もん。もやう。しまるいをきざる事也。くはらを

うがちとは。くはらは小さき袈裟の五條あるをきる也。略せるもありと見えたり。うがちとはかくる事也。べいのうをいだきとは。今の三衣袋をかけし事也。くはんえうりふもつてとは。顔をおおふ為に。あみ笠の丸きをもつて。かくせし事也としるべし。

逍遥于城
シヤウ、エウ、シヤウ

市^シ戸^ニ戸^コ發^コ虛^ニ鐸^キ あやうしに。せうえうして。ここに

かうちに少^シて。取^リて城^シ下^ノ町^ノ村^ノ家^ノ門^ノ外^ニ さよたくをふき。あゆまやうしあるれり

遠^{エン}行^コ即^ス服^ハ上^ス施^ス手^ホ巾^コ著^シ脚^キ胖^ニ草^ニ鞋^ニ シユキニヲツケキヤハントサウアイトラ

大^ダ包^ハ袱^フ 方五尺也 以^モ蔽^ツ副^フ子^ス乾^ケ坤^ン張^バ ツケンバツラ

乾坤張

不生不滅

是ハ小板をもつて為^ス之^ニ。一^ツ面^ツ少^クを^シ書^ク乾^ケ坤^ン張^バ此^レ三^ノ字^ト 一^ツ面^ツ少^ク不生^セ不^フ滅^スの四字^ヲを^シ書^ク一^ツ歩^ヲ行^クは^シこれ^ヲ持^ツ

じやうしに、せうえうして、ここに

きよたくをはつすとは、右の

かたちにて、所々の城下町々村々の家々の門戸の外

にて、きよたくをふき、しゆぎやうしあるかれし事也。

是は小板をもつて為之。一面には書乾坤張の三字、
一面には不生不滅の四字を書し、歩行にこれを持。

(p 118) 以木綿為之。長短因副子大小。是は中をゆいつくる事なり。長さ大小によるべし

えんこうには、すなはち、ふくじやうにしゆきんを
ほどこしとは、とおき所にゆくときはきるもの

のうへに、しゆきんをもつて、おびの上を引しめし事也。
きやはん、さうあいをつけとは、きやはんをはきわら

づをはきし事也。大ほうふくとは、風呂敷の事也。
方五尺とは、五尺四方のふる敷なるゆへなり。ふくすを
おふとは、其風呂敷にて、ふくすをつつみし事なり。
けんこん張にて風呂敷をのばせし事也。中ゆいもつて

以張之中結。以木綿為之。長短因副子大

以結之行。行李盡盛于此。以

負之。何ど出さる。まさきあやゆくとまじりぬ

乃る人。きよもきんをりつて。おびの上を引しめし事也。
さうやさん。さうかい城つあは。まやさんをはきわら

づをはきし事也。大わらゆくと。風呂敷の事也。
方五尺とは。五尺四方のふる敷なるゆへなり。ふくすを

おふとは。其風呂敷にて。ふくすをつつみし事なり。
けんこん張にて。風呂敷をのばせし事也。中ゆいもつて

是をむすびと云。中ゆいみそ。ふくまの中をまわらふ
事也。乃中入用此乃ををふくまの中に入れておふ也。

行李ハ唐音あん里とよむ。往以見虚風虚
乃中此用此物とすていふ事也。

風怪問曰狂客此何状乎對曰在
アマニシトフテイワク キヤウカク コレ ナニノカチヂヤ コタヘテイワク ムカ

昔先師普化禪師遊于城市振鐸
シセシシ フケセシ アシニホ ジシヤウ シニ フルフテ タクラ

而為狂小子亦欲倣之
シカモ ナセリ キヤウヲ シヤウシモ ミタ フモリ。オアシト ユいてさうまう
にゆみゆふたれ

かちちさよあうあやーと回ていりく。さうまうかくハ。是
あんのさちそやと云。さうまう。さうまひむきんて。そちハ

p 119

是をむすびとは、中ゆいにて、ふくすの中をしめたる
事也。道中入用の道具をふくすの中に入れておふ也。

行李は唐音あんりとよむ、道中の用意物をすべていふ事也。

ゆいてきよふうに、まみゆとは、右の

かたちきよふうあやしみ問ていはく、きやうかくは、是
なんのかたちぞやとは、きよふう、きよむを見て、そちは

江上風月



虛風
別于
虛無
之圖

東海道

卷之五

三十一

東海道

虛無之行
無脚之始



気がちがいはせぬか、わけもないなりをしてとたづねし
事也。きよむこたへていはく、むかし先師普化禪師、城
下或は市町にあそびあるき、たくをふりて、きやうじん
のごとく偈をとなへ給ひし也。われも其まねをして、かく
のごとく狂人のやうなる
かたちをするといふ事也。

康金傳 卷之中

氣がちがいはせぬか、わけもないなりをしてとたづねし
事也。きよむこたへていはく、むかし先師普化禪師、城
下或は市町にあそびあるき、たくをふりて、きやうじん
のごとく偈をとなへ給ひし也。われも其まねをして、かく
のごとく狂人のやうなる
かたちをするといふ事也。

以莞圓笠號天蓋以脫爲不敬蔽
モツテ クワン エン リフラ ガウシ テニ ガイト モツテ ヲツスルヲ ス フ ケイ ヲ、フテ
以莞圓笠號天蓋以脫爲不敬蔽

以對客此即市中之棲遲幽居且
モツテ タイセシ カクニ コレ ス、大チ シチウ センチ ユウ ナリカツ
以對客此即市中之棲遲幽居且

吾輩之僧死則袂巾以包尸副子
ワガ ヒモカラ ノ ソウ シスル トキハ フク キン モツテ ツ、ミ シカキヲ フク ス
吾輩之僧死則袂巾以包尸副子

以^{モツテ}爲^{ナシ}席^{セキト}中^{チウ}結^{ケツ}以^{モツテ}結^{ムスビ}之^{コレヲ}埋^{ウツンテ}之^{コレヲ}土^ド中^{チウニ}乾^{ケン}

坤^{コン}張^{バリ}以^{モツテ}爲^{ナシ}碑^ヒ銘^{メイ}虚^{キヨ}鐸^{タク}以^{モツテ}爲^{ナサニ}樂^{ガク}葬^{ソウ}行^{アヒ}

脚^{キヤ}中^{チウニ}死^{シス}者^{モノ}欲^{ホツヌ}一^{イツニ}以^{モツテ}之^{コレヲ}爲^{セント}法^{ホウト}焉^ヨ意^{モフニ}夫^{フウ}

子^{シノ}意^{コノロ}如^イ何^{カンゾヤ}乎^ヤ
是^是ハ虚^虚無^無ガ又^又ハ死^死ニシテ
今^今モ虚^虚無^無トシテ編^編笠^笠を天^天

蓋^蓋ト名^名づけて、ぬぐとふれいとあて。ふさふさくはあふ。これ町中に住るが隠者の心也。まじりやうある僧乃死するなり。大なる愛よ死ぬに成ほす。中由い少てそれをむむむ。ふくまを下にあきて。うらむるこ

蓋、(Faulstich) 編笠を天

p 123

是は虚無が又いはれし事也。われは今ほうしきといふて、編笠を天蓋と名づけて、ぬぐをぶれいとして、かづきながら人にあふ。これ町中に住ながら隠者の心也。われらがやうなる僧の死するときは、大なる敷に死がいをつつみ、中ゆひにてそれをむすび、ふくすを下にしきて、うづむる也。

(p124) しかれば其上に、けんこんばりたてて、はかのごとくし、虚鐸を吹て、これをとぶるふ。これおもほうしきとせんとおもふが夫子は心に何とおぼしめす問かへす。

虚風其いふ所、一々理あり。尤に思ひ其心をかんじ、しやうびして、行脚の身は、げにもかく有べき事と唯々とうけがふて居られしが、それより諸国を遊行するをしべつすと云なり。虚風の許を辞して別れ行しなり。

これはそれより後、虚無が日本国をまはりて、きよたくを吹て此宗門を世人にすすめて

虚鐸

卷之中

(三)

吹て。あれをさふらふ。それをもほしきとせんとおぼしむる

夫子のいふ何と 虚風感賞唯々而辭別

虚風をいふ所。一々理あり。尤に思ひ其心をかんじ。しやうびして居られしが、それより諸国を遊行するをしべつすと云なり。虚風の許を辞して別れ行しなり。

虚風をいふ所。一々理あり。尤に思ひ其心をかんじ。しやうびして居られしが、それより諸国を遊行するをしべつすと云なり。虚風の許を辞して別れ行しなり。

爾後虚無廻遊于五畿七道以弄

虚鐸音 是もそれより後。虚無が日本国をまはりて。きよたくを吹て此宗門を世人にすすめて

はるまじくしむをのせり立畿ハ王城乃我色ミケ國之あり。七乃ハ
東海。東山。北陸。南海。山陽。山陰。西海乃大日本國八道の由之

世人問日子是何者乎對曰僧虚

無於此乎世人稱此徒爲虚無僧

是ハ虚無ニ世間ノ人々ガ。モスグク此ノ異稱アリト云テ。
ふーじまはのひて。まゑの名ハ何トのふぞと云フコ
一問。ま返るに。わ達の出家みて。虚無と云ふのありと。
いられ。我字て。世の人ガ次第に。呼びつて。さよむ
僧と云ひしむあり。そねらう今ふ。熱名と云ふこと。
虚無僧と云ひは。さよむ。ハ僧よりと知るべし。

P 125

まわりし事を明せり。五畿は王城の近辺五ヶ國なり。七道は
東海、東山、北陸、南海、山陽、山陰、西海道、大日本八道の国也。

是は虚無に世間の人々が、其すがたの異形なるを見て、
ふしぎにおもひて、其元の名は何といふぞとたづね
し時、其返事に、われは出家にて、虚無と申ものなりと、
いはれしを聞て、世の人が、次第によびつたへて、きよむ
僧といひし事なり。それより今に惣名となりたる也。
虚無僧といひつたふ事、此僧よりと知るべし。

諸国に多く弟

子出来たりし事也。いづれも弟子となりし輩、すべて虚無の形をまねびて、其すがたに取つくるふ事になりし、中にもいたつて、物数寄するものは、くさり

はちまち、ほうめんをきて、太刀よるひどうしなどさして通行せし事、つまびらかに知らざりしが其比は、

皆々武門の浪人の面々、此宗門に入て、日本国中を武者修行のために、国々をめぐりて、ありきしが、浪人

時の渡世ともなり、還俗して其国々に仕官奉公する

上 諸國門人多爲此狀甚則至于爲

下 鉄頭帶頬當佩長刀或は首

諸國門人多爲此狀甚則至于爲

鉄頭帶頬當佩長刀或は首

子出来たりし事也。いづれも弟子となりし輩、すべて虚無の形をまねびて、其すがたに取つくるふ事になりし、中にもいたつて、物数寄するものは、くさり

はちまち、ほうめんをきて、太刀よるひどうしなどさして通行せし事、つまびらかに知らざりしが其比は、

皆々武門の浪人の面々、此宗門に入て、日本国中を武者修行のために、国々をめぐりて、ありきしが、浪人

時の渡世ともなり、還俗して其国々に仕官奉公する

虚無歸江州暫任志賀之

邊而傳之儀道

儀道傳之自東

自東歷八代

而傳知來

時既無有虚鐸之名唯稱虚鈴而

(p127) もおほかりけるなり。

其後虚無は、江州のしがのへんにすみしが、ここに儀道といふ人に、きよたくをつたえられし事をあかせり。

是は八代の名にて八伝なりし。儀道はきよたくを自東におしへ、じとうより八代を経て知来に至る

虚風

虚無 (橋三勝) 虚無僧の祖

儀道

自東

八代 1 2 可笑 3 空来 4 自空 5

1 5 惠中 6 一黙 7 普明 1

知来

遁翁

無風

月山

幻堂

眠好

一宥

理中

一也

虚鐸伝記 国字解の作者 (著者者) (参) 国字解を加えたのは山本守秀

其知来に伝へて、ふきしみぎりは、きよたくの名をしるもの少もなし。

ただきよれいとしやうじ、ふきやうの名とするばかりなり。

又尺八とよびきる事は、からにても日本にても同じ事也。

たれか名付しといふ事知れず、かんがへ見るに、笛竹の寸尺に

(上) おなじて始に付たりと聞ゆ。しかれども始は一ト節切も吹たり。

かり
(一唐)

知来はこれを予に

伝ふとは、予は

屋金一

ニニト

為^{スル}曲^{キヨクト}耳^ノ其^{セラ}稱^{スル}尺^{ハチト}八^{モノ}者^ハ華^カ和^ワ共^ト爾^モ未^ズ

知^{シラ}誰^{タレカ}命^{メイ}之^{シテ} 其^カ知^ル来^ルに^レ傳^フて。ふきよしみぎりは。

たきよきよいとよびよる。ふきよしみぎりは。又尺八とよびよる。うらにても日本にても同じ事なり。

多れり名付しといふ事知れず。かんがへ見るに。笛竹の寸尺は、たれか名付しといふ事知れず。かんがへ見るに。笛竹の寸尺は、たれか名付しといふ事知れず。かんがへ見るに。笛竹の寸尺は、

知^チ来^{ライ}傳^{ツタフ}之^{コレヲ}予^{ヨニ}予^ヨ傳^{ツタフ}之^{コレヲ}無^ム風^{フウ}無^ム風^{フウ}或^チ

就^{ツイテ}他^タ師^シ而^{シカモ}為^{ナス}無^ム盡^{ジン}調^{テウ}曲^{キヨク} 知^チ来^{ライ}之^{コレヲ}予^{ヨニ}予^ヨ傳^{ツタフ}之^{コレヲ}無^ム風^{フウ}無^ム風^{フウ}或^チ

道翁自身の手記。は僧記を知りたる人故に。虚鐸の曲をなら
 りて一より。其後とんをより無風はたれし。其れが
 無風の其の後他の師をわれやとて。いろくれも我
 習ひし事。まゝいふ。乃宗門の事。古義をば失ちる
 おと取れとのこり。此はまゝ。宗僧の得るべし。

宗僧の得るべし

宗僧の得るべし

宗僧の得るべし

伝

p129

道翁自身の事也。此僧記を知りたる人故に、虚鐸の曲をなら
 はれし事なり。其後とんをより無風におしへられしが、
 無風は其以後他の師をあれやこれと取て、いろいろの手を
 習ひし事也。其いにしへの宗門の事、古義をば失なふ
 ことなかれとのみ申のこされたり。宗僧心得給ふべし。

○無風

門人

淵月

月山

幻堂

眠好

一省

理中

一圭